

からその入学のために一生に一度の努力をすることになる。日本と欧米の教育界の最大のちがいがそこにあ

る。わかっているけれど改革はできない。大学人の1人として心痛む。

## 初島にタッチする

式 正 英

初島は気になる島である。東海道線の真鶴から熱海、さらに伊東線に乗り継げばその先の伊東あたりまで、車窓から眺める海上に平坦な島が浮かんでいて、先づ消えることがない。「一度は涉ってみたい」と思いながら、10km巾の一衣帯水は何時でも叶えられると高を括って果さぬまゝ何10年も打過ぎてしまった。やっと昨年の3月末、熱海まで行った序いでに初島航路の船に急に思いたって乗る気になった。バイオニア号と名付けられた小汽船で35分ほどかゝって到着する。しかし上陸して間もなく雨が降り出し、海上は時化の様相を示し始めた。波が荒くなると欠航という事態も起きよう。出来心で渡島したまゝ帰れなくなつては厄介なことになる。そうした判断で僅か2時間ほどの在島で島を離れた。

いくら面積が0.44平方km、周囲4kmほどの小島でも2時間では何を語る資格もない訳だが、やはりその場所に触れることは、遠くから眺めるだけよりも遥かに意義深い。港から舗装された歩道なりに海沿いの大磯の浜を東に歩くと、観光施設の「初島バケーションランド」にそのまま入られる仕組みになっている。島全体が火山岩から成る海岸段丘だが、その上段の東の一角を占め登台の根元まで、芝生をベースにヤシ、ソテツ、シュロなどを配置した亜熱帯植物園がしつらえられ、散策し易いように出来ている。しかしそこまで行って雲行きの怪しいことから港の方へとって返すことにした。港のまわりの下段の段丘面は唯一の集落が立地する場所だが、その近くの路沿いに、往きには気付かなかつたが、小さな食堂がいくつか並んでいた。いずれも島の人の経営するもので観光客相手に刺身や天ぷらやアワビを御数に簡単な食事を用意する程度の店である。

その内の一軒に入り雨を避けがてら昼食をとることにした。その窓ガラスに貼ってあった空中写真をたねに島のもろもろのことを経営者のおばさん相手に訊ねてみることにした。するとそれまでにあった断片的知識が呼びさまされて、初島の特色に改めて興味深

い感じを抱くようになった。集落は人口約200、40戸から成り、全部が民宿を兼業しているから民宿は40軒、他に中・小学校・保育園の職員の世帯が13という。テングサ採りの海女さんが昔は朝鮮から来島していたと意外な話もあった。

窓にあった空中写真は2500分の1位のカラー写真地図で、ディテールがよく出ている上に、沖合いまで含めて細かい地名が加刷されている。島の平面は尾を北西に向けた魚のエイの形で五角形とも云えよう。最高所は33.5m、周囲に崖をめぐらした段丘島は上段の平坦地が面積の殆どを占め、そのすべてが畑地と云ってよく、防風用の垣根で区画されている。名物の初島タクアンの原料となる大根やジャガイモを主な作物とするが、1戸あたり0.3haほどの農地故に、園芸的に経営されている。対岸の伊豆山温泉背後の七尾のタクアン漬も80年ほど前から旅館との特約で始まっているから、初島タクアンもこれと似た様な考えで始められたものである。とも角、土産としてタクアンを買い、くだんの空中写真も別に何枚もあるからと言われるままに戴いてしまった。

港に近い処にある漁協の事務所が熱海市初島地区の事務所も兼ねていて、たまたま1人おられた職員にお願いして、如何にも自前でつくつたようなパンフレット「初島の概要」を手に入れることができた。それには「天保元年(1830年)、戸数41戸、その後増減なく現在に致る。」とさり気なく記されている。1985年12月末の統計資料によると初島の人口は189人、60世帯とある。人口は漸減している様だが、教員や診療所などの世帯を除けば、こゝ200年ばかりの間の戸数は変化していない。この戸数固定化の現象はつとに学界の注目を浴び、島嶼社会研究会の1951年の調査によって次のような結論を得ている。「増加の抑制は均分収益の細分化を防ぎ、減少の抑制は共同漁業の労働力確保のためである。」(浅野芳正：伊豆初島、しま9巻2号、1963年) 18世紀末以来、カツオ網が導入され集落全戸による共同労働、共同経営がなされ暫くして戸数の固定が始まっ

たと見られている。次二男を島外分家させる一方、絶家の場合には島外から分家を呼び戻す形で、厳格に戸数が守られて来た。網漁業からの必要性もさることながら島の面積が小さく限られていることが基本にある。1949年に初めて定期船が通うようになって以来次第に便利になり、島をあげて観光にとりこんでいる姿勢は現在の全戸民宿という形でもよく判る。漁船も40隻だから漁業も農業も、そして食堂・民宿もすべてにわたって兼業していることになる。初島にわたる人の数は10月だと1万人を越え伊豆大島への渡島者とそう変わらない数字であり、充分観光化の実績もあがっている。こうした質的な変化を経ても、戸数固定が今のところ守られているのは、注目すべきことに違いない。

さて初島の語源は、はしま（<sup>はし</sup>端の島）にあるようだが、静岡県唯一の離島であるというのも面白い。熱海市に属していることもあって水道や電気など公共投資はかなり徹底している。1967年以来、電気は熱海から海底ケーブルによって送電されている。それ以前は1953年まではランプ、その後は自家発電であった。1980年、水道も網代から海底送水管が敷設され、上水が直接供給されている。それ以前は浅井戸水源の簡易水道で脱塩施設を必要としていた。今では水も電気も本土から送られているのだから、単純に離島のイメージを当てはめる訳にもいかない。ともあれ初島に一寸タッチしただけでも地理の課題が続々掘り出せた気がしている。(1987年2月1日)

## 世界図考

井内 昇

近年国際化をめぐる論議がかまびすしい。個人レベルで国際化にどう対応するかは人さまざまであろうが、要は世界をどう認識するかに盡きるであろう。だが、その認識のあり方には決定的なものがあるわけではない。しかし、いやしくも地理学を専攻する立場からすれば、地表の諸事象の空間的相互関係を正確に理解していること、具体的にいえば地図の上で正確に表現された世界像を持つことがその基本となるだろう。

近代測量術の発達によって地表の諸事象の位置関係は正確に知られるようになり、人工衛星の出現で今や誤差を無視できるまでになった。しかし、近代測量術がとり入れられる以前の世界図は、情報の不足や表現技法の幼稚さもあって凡そ正確というには程遠いものであった。だが、このような当時の稚拙な地図（というよりは絵図）も、当時の人々が頭の中にえがいた世界のイメージをうかがえるという点で別の興味の対象となりうる。数多の古地図の中でも、この点でとくに価値のあるのはいうまでもなくプトレマイオスの世界図で、イスラム世界を経て近世のヨーロッパ世界まで、1000年以上にわたって生きのびたこの地図が、当時の人々の世界認識にどう影響を及ぼしたかは、それ自体が地理学発達史の重要なテーマである。61年度に担当した「地理学概論」をプトレマイオスからスタートしたのもそのためであったが、この時受講学生（地理科4年生）にも世界図を画いてもらうことにした。また、比較のため

にはほぼ同数のT大学文学部生にも同じ条件で画いてもらった。試みに当っての私の事前の予測は、(1)地理科生の世界図は一般学生の世界図に比べ平均水準は高いであろう。(2)一般学生の世界図の出来ばえには専攻学科の違いが反映するであろう。といったものであった。画いてもらうための具体的条件は、赤道、東西経度180度線、及びグリニッジ本初子午線を入れた長方形の白図を与え、その上に諸大陸と主要な島を記入し、さらに世界の主要都市、地名、山脈、島嶼名を与えその位置を記入させる、というものである。

両者合わせて約40枚の世界図からは色々の発見があったが、幾つかを紹介してみよう。①地理科生は位置関係や形状に関してはT大生よりも正確にえがいているが、誤りも決して少なくない。②きわめて正確な図を画いた数人はいずれもT大生で、専攻はマチマチであった。③プトレマイオスの時代を思わせる不正確な世界図も数枚あったが、これらもT大生の作品であった。

この世界図作成に関して私が事前に興味を持った点は、①先進・途上国で正確さに差が出るか？②赤道との（南北方向の）位置関係の正確さ、③北半球諸都市の緯度上の関係、④有名観光地、国際政治上重要な都市、地名の正確さ、等であったが、②と③はわりに正確であったのに対し、アフリカ、中近東に関して誤りが多く、とくに当時連日新聞を賑わしていたリビアの位置